

# いずみ会々報



## 創立30周年特集

## 大泉高校30周年を迎えて

学校長 間瀬正次

「いざみ会」の機関誌の編集者岡さんから、本校の三十七周年にちなんだ原稿を依頼されてまっ先に思い浮んだのは、昭和四十二年に西ドイツに約三カ月滞在したときの次の思い出であった。

一つは北部の貿易都市ハンブルグは、第二次世界大戦で連合軍の猛爆によりすっかり灰燼に帰したが、その後の戦後の復興でまったく不死鳥のように元の都市の姿をとり戻し、町並も建物も公園も変わらないということであった。二つは中部の文化都市フランクフルトで、五十年近い伝統のあるギムナジウム（わが国の中学と高校を統合した中等学校）を訪れたとき、戦争で傷痍軍人となった老令の校長が私に対して「租国ドイツは過去二回過ちを犯したが、ドイツ精神を忘れてはいない。今後は過去のよい点を受け継ぎ新らしい時代のよい点を取り

入れて世界に貢献していきなさい。」と決然と語ったことであつた。三つは南部の商業都市ミュンヘンはオリンピックに向つて建設途上にあつたが、都心部の古い町の面影と郊外の新しい町の模様替えとが調和がとれて、より美しく健康で住み心地よい環境づくりに努力していることであつた。以上のことから、私も本校第七代の校長として本年三十七周年記念を迎えるに当つて、大泉高校のよい伝統を引き継ぎ新らしい時代にふさわしいものを加えて、望ましい学園としての教育環境の創造に努力したいと思ひ、いままで微力を尽くしてきた。幸いに昭和四十四年には待望の校庭が降りによる水溜りの懸念がと除かれた。ついで四十五年には管理塔の西半分が鉄筋化されて、正門からの眺めが面目一新した。本年度は南およ

び西の老朽木造校舎を取り壊して整地し、そこに新らしい施設を造りたいと考えている。さて今秋十月に本校三十周年の記念を迎えるに当つて、

教職員やPTA役員の方々とご相談した結果、特別の式典や祝賀は行なわなにかわりに環境整美事業の一環として中庭に小庭園。玄関前の美化。老朽樹木の植替えなどを実施することになった。その他に、この際皆さんの思い出の施設として榛名寮の修理もできる

だけしたいと思つている。これらのプランニングについて皆さんからよいアイデアがあれば、ぜひ積極的に寄せたいだければと期待している。それぞれの学校には歴史があり、過去から現在さらに将来へとよい伝統を創造していかなくてはならない。これには教職員と在校生とPTAさらには卒業生との協力が必要である。この意味で、本年の三十周年を契機として本校のいっそうの発展を期したいので、皆さんからのご協力をお願いする次第である。

三十年

池辺洋

早い朝の食事がすむかすまぬに、「あそぼうよ」とよびにくる。山の宿でのこと、わたしは女の子と友達になつた。五才の幼稚園児。可愛い子だつた。マシマロのように。おしゃべりしたり、ボール投げをしたり、わたしにはよい夏休みだつた。――三十年たったらこの子はどうなるだろうと、その時考えたわけではない。この文を書き始めようとしてのことである。

もちろんどうなるかわかる筈もない。世の中が、第一、凄く変つていることだろう。（廿一世紀の元日、新聞は見出しに何と書くのだろう。お屠蘇気分なんて感じ、まだあるのだろうか。）何もわからない。けれど、これからの三十年という時間は、いかにも重い。三十年前大泉中学は誕生した。これから先の時間は、想像もつかない程たっぷりしているけれども、過ぎた三十年はまるであつけない。一期生が四十三才、新卒業生が高校二十三期、卒業生九千名、というのが一つの歴史である。が、これは短い。ようやくここまで来た、という感じである。同窓会も若い。大泉中学の想い出は戦争の生活である。若い人と話していて「大東亜戦争」と云つたら、それなんですかと聞かれた。不覚であつたと思つたが、その後の新聞記事の中にちゃんと

その言葉が生きていたので、あゝ、と感じた。大東亜戦争でも第二次大戦でもい、けれど、大泉の生活を、戦争と結びつけてしか記憶しない世代と、そんなこと想像だにしない人達と、これは全然違う。わたし達にとっては動員と空襲と練馬大根と、そして夕靨の佗しさであった大泉は、二十三期生にとって何であらう。わたしにはわからない。今年、練馬大根の生産もとめられた。やはり歴史は三十年の時間を確実に経ている。先輩が勝手に想い出話にしてもそれは往々にして無駄である。だが、それでもまだまだ同窓会は若いと思う。組織作りが不十分というだけのことではなくて、伝統とかいったものの深味には至らないし、人間のバラエティに乏しい。戦争を仲立にしての話が通じないとしても、それだけのことである。第一ピリオドの通過であって、これから年を経ながら一人前になっていく。

むかしの大泉生は土の子であった。今はもつとスマートなのだろうが、若い人達はのびのびと明るく、美しく、聡明である。三十年後の若者たちもきつとそうだろう。そして願わくば土臭く。もし後輩に望むとしたらそれだけである。お盆に萬難を排して帰郷する人達は、その時だけ同級生に会えるのだ、と話していた。都会と違うところだけれども、そんな意味でも土の香を。

今、いろんな所で「転機」という言葉が使われる。その社会的意味も含めて、大泉の「三十年」がある。

## 母校を忍ぶ

19期 五 藤 基

大泉高校を去って、はや四年の月日が流れた。まったくアツという間だった。この四年間に私の周辺にもずい分多くのことが起ったが、なぜか私にとっては高校時代の方が強く、楽しい印象が残っている。おそらく、大学に入ってから、精神的怠惰には大きな原因があるのだろう。特に、長く、大きかった大学の斗争が過ぎた後は、退屈な日々が続続であった。自分の考え方もずつかり変ってしまったし、それまで続いていた「大泉高校気質」もガラガラと音をたててくずれてしまったような気がする。それだけに、余計に高校当時からなつかしく思われる。希望に満ちた、しかし不安の入り混ったはりつめた気持ちで毎日を通していたものである。そのせいか、クラブにも勉強にも、また他のどんなことにも一生懸命打ち込んで覚えがある。今でもクラブには特に楽しい思い出が多く、私の高校生活はクラブ一辺倒であったと言っても過言ではない。

今になっても、コンバでの現役、後輩たちとの交わりや、OB会での先輩や一緒に笑い、泣いた仲間達との再会は、私に無限の喜びを与えてくれる。他には、サッカー部なども母校で開くOB会には二十年も前の卒業生（ほとんどが小学生、幼稚園児の父親である）が出席され、現役と共にボールを蹴って楽しい一時を過ごされる。私は文化部出身なので、そのような楽しさはないが、先輩や後輩との交歓を通じて自らの高校時代、当時の母校の姿を忍ぶ心は、まったく同質のものであるにちがいない。

文化部と言えば、最近では文化部に入る生徒が非常に減たと聞く。そう言えば私のクラブもこの二、三年不調で、特に男子はまったく入部してくれないような状態が二年程続いた。今年はかろうじて二名ほど入ってくれたらしいのでホットしている。私達の現役時代には、やはり女子が多かったのだが、新年度初の部会には教室外いっぱいにもな

ったのである。一般に、学校群制度になつてから大泉高校も随分変質したと言われるが、文化部のこのような変質ぶりもその一端かも知れない。

私の家は母校のすぐ裏にあるので朝に夕によく生徒に会うし、また、いずみ会の幹事でもあるので母校にはよく訪れるのだが、確かに我々の時代の大泉とは異質な何かを感じる。第一に長髪族の数が我々の時代よりはるかに多くなった。我々の頃のまだ子供じみたはりつめた顔が減つたし、高校生同志のカツブルも随分ふえたようだ。

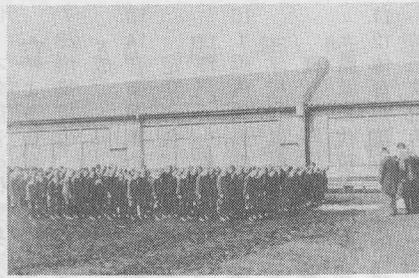
言ってみれば現在の大学がそのまま高校に降りたような感じがする。良い所と共に大学や社会のかかえた諸矛盾をも高校が導入した感がある。

高校に多くの斗争が起るようになったせいであろう。生徒の質がいくら変わるうとも、卒業後母校をなつかしむ心は誰にも持つてもらいたい。総会に集まる人があまりにも少ない。いずみ会の幹事として、このことを声を大にして全卒業生に訴えたい。

沿革略史

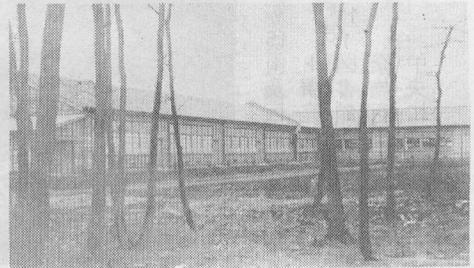
昭月日

- 16 2 3 東京府立第二十中学校として設置。府立豊島師範学校教諭室岡孝治初代校長に就任。
- 4 7 中野区鷺宮五丁目の仮校舎において開校。第一回入学式挙行。



第一回入学式光景

- 4 9 正規の授業開始。
- 5 2 春季遠足に豊島園・石神井公園。
- 12 8 宣戦の大詔渙発。
- 12 23 戦勝祈願参拝行軍実施(明治神宮↓靖国神社↓二重橋前)。
- 17 1 31 東京府立大泉中学校と



鷺宮仮校舎風景

- 改称。練馬区(当時板橋区)東大泉町三八〇番地に校地決定。
- 3 5 校地地鎮祭執行。
- 8 26 全校勤労作業実施(小金井国民練成所・大泉農場)。
- これより報国隊の編成・訓練(夜間行軍・耐寒行軍。防空訓練など)、勤労動員(工場・麦刈り。石神井川改修工事など)終戦まで度々—
- 10 22 日光方面に一泊修学旅行。
- 11 14 東大泉町新校舎棟上式を挙行。
- 18 3 29 新校舎に移転開始(職

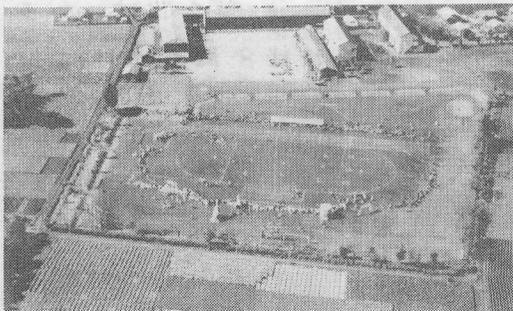


18年でも少(左、門正)式樹植(右、残つてい)る。

- 員生徒の奉仕作業)。
- 3 31 現在地に移転完了。生徒総数七六〇名。
- 7 1 都制施行により東京都立大泉中学校と改称。
- 19 5 9 防空壕作業着手。同月18日頃校庭に完成。
- 20 3 29 都立大泉中学第一回卒業式。本年度より中学校四年制となる。
- 4 12 校庭北側に大型爆弾数個落下、死傷者なし。
- 8 15 終戦の詔書放送。
- 21 3 31 室岡校長都立上野中学校長に転補、都税学官両角英運第二代校長に就任。

- 4 10 都男女共学モデル校に指定され女子三七名を含む男女共学組を二学級編成。(前年度に両角校長の意志により女子三名入学)
- 10 5 十和田湖に二泊三日修学旅行。
- 24 3 2 高等学校第一回卒業式挙行。
- 5 1 定時制課程併置
- 4 12 新制高等学校開校式を挙行。生徒総数四二三名。

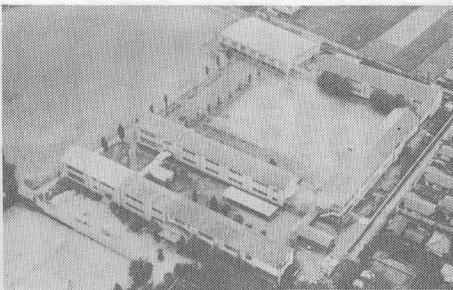
- 9 29 生徒製作品展覧会。
- 10 9 全校甘薯掘り実施。
- 22 2 25 臨時職員会議により校友の歌決定(伊藤静作詞、高田三郎作曲)。
- 3 31 パラック校舎竣工。
- 4 1 新学制実施。
- 10 17 学校祭挙行(第一日演劇・第二日作品展・第三日運動会)。
- 11 28 元箱根一泊修学旅行。
- 25 4 1 新制高等学校移行により東京都立大泉高等学校と改称。



29年運動会。コッス屋の平屋のバラスのクッ

- 25 5 10 都男女共学実験校に指定される。男女共学。保健体育研究開始。
- 26 1 17 米国教育事情視察の為両角校長渡米壮行式挙行(25日出発)。
- 3 6 定時制第一回卒業式。
- 5 15 学校長婦国敏迎式挙行(13日に帰国)。
- 5 21 関西方面四泊五日の修学旅行。
- 8 13 増築校舎(玄関及び二教室)落成
- 10 13 創立十周年記念式典挙行(展覧会13 14日・運

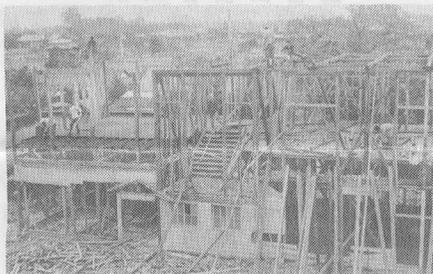
- 31 1 28 体育館こけら落とし。
- 4 1 新カリキュラム実施。各学年・各教科に主任をおく。
- 12 2 長野県スキー教室開設
- 32 8 2 千葉県富浦臨海学校開設。
- 9 28 N H K 美容体操講習会開催
- 27 5 22 定時制課程清瀬分校を設置。
- 6 29 同窓会「いずみ会」と改称。
- 11 14 英語教育刷新によりパーマ受賞。
- 28 12 1 本年度音楽研究指定校により音楽研究会開催
- 29 7 28 増築校舎（六教室）落成。
- 10 14 音楽演劇の会・校歌制定発表会（日夏耿之介作詞・小松清作曲）。
- 30 10 1 両角校長都立九段高等学校長に転補、都立武蔵丘高等学校長清水安麿第三代校長に就任。
- 11 12 体育館落成式（松村謙三文部大臣臨席。）
- 9 29 定時制十周年記念式典
- 33 3 27 増築校舎（家庭科室及び二教室）落成。
- 8 31 パラック校舎取りこわし。
- 9 19 大泉榛名寮上棟式。
- 34 7 25 榛名寮竣工。
- 35 2 6 榛名スケート教室開設
- 3 10 増築校舎（音楽・工芸会議・校長室等）落成。



35年5月

- 9 15 南及西側にコンクリート堀完成。
- 11 1 図書館生徒ホール地鎮祭施行（右写真中庭の中央に建設）。

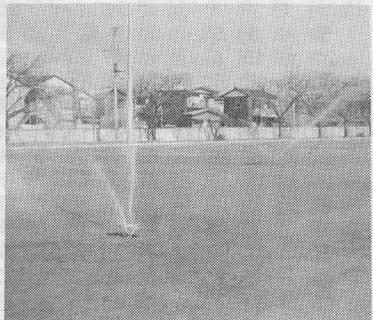
- 36 3 31 清水校長都立両国高等学校長に転補、都立千歳丘高等学校長小川定胆第四代校長に就任。
- 4 30 円形校舎落成。
- 10 12 創立二十周年記念式典・円形校舎落成式挙行。
- 38 4 1 小川校長都立九段高等学校長に転補、都立大森高等学校長清水貞助第五代校長に就任。
- 39 7 31 榛名寮増築（五十名宿泊可能となる）。
- 9 19 清水校長欧州教育事情
- 36 3 31 清水校長都立両国高等学校長に転補、都立千歳丘高等学校長小川定胆第四代校長に就任。
- 4 30 円形校舎落成。
- 10 12 創立二十周年記念式典・円形校舎落成式挙行。
- 38 4 1 小川校長都立九段高等学校長に転補、都立大森高等学校長清水貞助第五代校長に就任。
- 39 7 31 榛名寮増築（五十名宿泊可能となる）。
- 9 19 清水校長欧州教育事情



45年9月 年々新たななり・・・

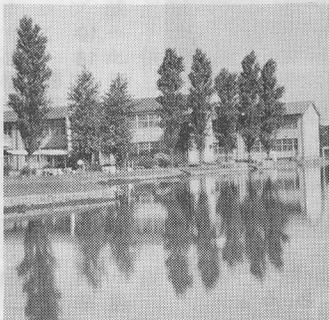
- 8 14 20 年投下の不発一トン爆弾発掘処理。
- 43 10 7 校庭土盛り作業開始。
- 44 3 31 所校長退職。都立教育研究調査普及部長間瀬正次第七代校長に就任
- 12 16 校庭整備事業竣工。
- 現在改築工事進行中（紙面担当SS）

現在の校庭



- 41 3 31 定時制清瀬分校廃校。
- 4 1 清水校長都立両国高等学校長に転補、都立赤坂高等学校長所弘第六代校長に就任。
- 7 20 正門竣工（門標は初代校長室岡孝治氏の揮毫による）。
- 41 3 31 定時制清瀬分校廃校。
- 4 1 清水校長都立両国高等学校長に転補、都立赤坂高等学校長所弘第六代校長に就任。
- 7 20 正門竣工（門標は初代校長室岡孝治氏の揮毫による）。

昔の校庭 雨が降れば・風が吹けば



掘去が... 発過す 弾に出 爆まを 発た顔 不

校歌作詞者

日夏耿之介氏  
逝く

校歌

- 一、千とせのむかし行末は  
空もひとつの武蔵野に  
月を仰ぎていそしめる  
みおやの民のすがた哉
- 二、檜栗櫟柏木や  
雑木林に身をおきて  
ころの里の雨を聴く  
明治の民のおもい哉
- 三、いまこの土に学舎の  
たかきをたてて  
石神井の  
きよき泉にかげうつす  
現世の民のいのち哉
- 四、あゝ大泉若き子が  
嶮しき時に抗がひて  
静かに祈り能く思ふ  
われらの道は平和のみ

日夏耿之介先生

橋本精一

本校校歌の作詞者、日夏耿之介(こうのすけ)先生は、六月十三日に郷里長野県飯田市で亡くなられた。

謹んでご冥福を祈る。

会報から校歌の思い出をという依頼があったので、第五号に書いた「我が校歌の由来」を補うこととする。

創立十周年に計画された校歌制定に努力されたのは、二代目校長故両角先生と、国語科の河合先生(現在本校定時制主事)であった。日夏先生のご病氣もあって、三年越しに二十九年我々の希望は達せられた。最初お願いした時には断られた。

「私は校歌を作るのは嫌いだ。校歌は詩としてあまり高くない。しかし今度は熱心な先生の頼みで引受けてしまった。校歌は、郷里の農業高校のもの、大泉のものだけで、これが私の最後の校歌である。永年住んでいる東京にもひとつとって作った。

大泉へ行ってみて山も川も

ない。武蔵野の中にあるのである。武蔵野の人の心の動きや、その環境を、教養ある人々にねらいをおいて歌ってみた。

このはげしい時代に、ここで静かに教養を身につけることのできる諸君は、幸福である。学究的態度で学び、そういう態度でこの歌も歌つてもいい。

先生は大体このようなことをお話しになつた。

「その日その日を最も有意義に過したいものだ。この戦後の混乱顔癩した世の中で苦しみ打ち勝つて生きて行くことは、平穩無事にのんびりと暮してしまふよりスリルがあつて楽しいのではないか。

嶮しき時に抗ひて静かに祈り能く思ふ。先生はこれを、歌つておられるのではないだろうか。そしてこれを歌う時もう一度私たちの周囲を見、生活をもっと深く掘り下げて考えて行くべきではなからうか。」

これは大泉新聞の委員が、先生のお宅で色々お話をうかがつた時の訪問記の一部である。

この歌の莊重な感じを出すには、作曲者小松清先生のご指定通り八十四のテンポで歌うべきであろうが、どういふものか長い間九十二位の速さで歌つていた。

この頃のことだと思出すのは「一学生歌」である。

校歌制定も刺激となつて、生徒会の中から気軽にいつても歌える明朗な歌を作ろうという運動が起り、それが実現し、数年間ではあったが、文化祭の頃に新しい楽しい歌が毎年発表され、歌われていた。

日夏耿之介氏年譜

- 明治二十三年 長野県下伊那郡飯田町(現飯田市)に生れる。
- 大正三年 早稲田大学文学部英文科卒業。
- 大正六年 第一詩集『転身の頌』を刊行。装幀・挿画は長谷川潔
- 大正十年 詩集『黒衣聖母』を刊行。
- 昭和二年 『黄眠帖』を刊行。
- 昭和四年 『明治大正詩史』を刊行
- 昭和六年 早稲田大学文学部教授となる。
- 昭和八年 詩集『咒文』を刊行。
- 昭和十二年 句集『溝五位句藁』、訳詞集『海表集』を刊行。
- 昭和十四年 文学博士の称号を受ける。
- 昭和十九年 『鷗外文学』、句集『娑羅門誹諧』を刊行。
- 昭和二十四年 『近代日本詩論』を刊行。
- 昭和二十五年 昭和二十三年・二十四年・創立社版改訂増補『明治大正詩史』により第一回読売文学賞を受賞
- 昭和二十七年 『明治浪漫文学史』および『日夏耿之介全詩集』の二著により日本芸術院賞を受け、また長野県飯田市名誉市民となる。

一年ぶりの母校

母校近況報告

だいぶど無沙汰していた。一年ぶりに大泉の土を踏んだ。なつかしい……。

おそらく、我々の多くにあって高校を出てからの一年間とは貴重な時期となる。社会の風を感じ、大学の存在の不確かさを思い、自己の選択に悔い悩む。若さゆえの戸惑い、と言うには、あまりにも生々しい。

高校卒業→未来への飛躍だった。過去をなつかしみ、追憶するには、あまりにも現在が忙し過ぎ、未来は魅力的だった。また、ある人は、早く過去から脱皮したいと焦つてもいた。

ここにおいて、母校とは何か、高校教育とは何か？ 眼前の制服のアクセントに、掲示板に反響する問。『文化祭の前夜祭のアンケート』、する。『……』、『ダンス発表会、七月三日(土)PM一時より、於体育館』、変わらな

いんだなあ。不思議なぐらいね。

『貸傘あります。利用者は前田のおばさんの所へ』可愛い絵入りポスター。これは以前なかった。何となく微笑ましかった。

どの屋上でも踊り場でも、女子が来たるべき発表会を前にダンスの特訓をしていた。この全員参加のグループ創作ダンスは、体育授業の内にある。大泉の新名物になりつつある。汗の中の清潔さを見る思いがした。

土盛りされた運動場、盛んなクラブ活動。高校生とは独特な生命をもっている。現在、教育制度の改革案等が話題になつているが、この高校独特の生命も貴重なものに思われる。

三年間の集い、いや、出会いという方が妥当だろう。そう。全く三年間の出会いだ。三年間、同じ大泉高校というトンネルをくぐって来た。そのトンネルの中で様々な先生友人に出会う。進み方は人によって皆違う。ある者は最短

距離を猛進し、ある者はいちいちトンネルの壁にぶつかり……。トンネルの出口まで来て皆別れた。各人の思いのままに新たな道に進み出た。

出合いを深めていくこと。それは何だ？ 人と人との在り方だと思ふ。考え方によつては、人間生きるための条件とも言えよう。

しかし、ここに一つの反発を覚えるのは何故だろう。過去をなつかしみ、追憶することを心趣味だと言う声。過去(の集団)からの脱皮こそ成長だと思ふ心理、母校に背を向けたくなる心境。

それでいて、大泉と聞くといっばいに広がるなつかしさ。母校という大きな木の下で同窓生が集まることの楽しさ、安らぎ。そして、しらじらしさ。

どれも皆真実だから隠せない。いずみ会についても同様に感じている。その事務的な重なり、責任は認めているが、どうもすんなりしない。浮き上がった存在に見える。こん

なことを言つて今まで長い間この会を守つて来てくださった先輩方や、現在活躍中の皆さんに申し訳ないのだが。とにかく、思い出の追憶だけに終わらず、出合いを大切にしたい生き方が中心とならなければならぬのだ。  
卒業一年後の感想を混じえて。(二十二期 池見)



ラグビー部OB会

本年度の大泉高校ラグビー部OB総会は恒例の現役OB対抗戦もまじえ、五月三日母校で五十人近くの新旧OBを集め挙行された。

この日は前年度の早稲田大学ラグビー部監督を務められた日比野弘さん(高6期)や慶応大学ラグビー部のOBでもおられる豊島志朗さん(高6期)ら往年の名選手も数多く参加され、久しぶりのラグビーゲームを楽しまれた。試合後は生徒ホールでOBと現役が同席し、各OBが現役チームへの激励やアドバイスを昔の思い出と共にいろいろと語った。

従来はOB戦後現役とOBとが短時間で紹介しあつただけで別々になつてしまつたので、今年度はOBの話しを現役にも聞かせてやりたいという顧問の先生の希望もあり、OBと現役の同席の会がOB同志のダベリ会の前に設けられたわけである。現役が退席してからはピ

ルを飲みながら一段と昔話にも花が……という楽しい会となつた。堤先生(現豊多摩高教諭)もOB戦後駆けつけてこられた。

この会の中で今年度の現役チームの新しいコーチとして去年の卒業生である小堀さん(学習院大)が選任された。また、OB会の規模が成長したのにもない名簿を作成するかどうかという話も上がつた。OB同志の連絡もとぎれてしまつている人がかなりいるというようになり、さも耳にするので名簿の作成も今後必要であろう。

今年の現役チームは新任の浅野哲郎先生(東教大OB)を迎え堤先生が転任のときに空いた穴が三年ぶりに埋まつた形で今後の活躍はかなり期待できることと思う。現役チームの成績は最近やや低迷気味だったが、今年度は五年ぶり十二回目の関東大会出場を果たし、低迷傾向に歯止めができたともみられる。なお保土ヶ谷での大会においても甲府工に勝利を収めた。

これから益々発展する大泉ラグビー部にとつて、OBの協力というものはかなりの比重であると思われる。これから夏期練習、合宿などを迎えるにあたり、OB諸氏の積極的参加を期待したい。(高23期 中村敏夫)

写真部OB会結成!

今年度OB会を作る事になつたのだと、うつかり口を滑らした為にこれを書く破目になつてしまつた。口は災の元である。OB会が結成したと言つても実のところ『OB会』の名を付けたと言つた方が確かだ、こんな場所に報告するのもおこがましい気がするのだがとにかく紹介しておく。

結成したのは今年の母校の運動会の時と言う事になるのだらう。と言つても話はかなり以前からあつて、二年前の夏に蓼科へ集団避暑(合宿と言つてもよいがより正確に表現するのがよからう)に行つた時分から、当時の自分達二年と受験勉強中の三年の間でちらほら。現役でOB会を作

るわけにもいかず、当然の事ながらやる気のある連中がOBになるまでは保留となり月日は変わつて今年の春、北国の大学へ行つた先輩から卒業生となつた我々に、OB会に関する風変わりなアンケートが舞い込んで、圧倒的多数をもつて成立決定。集まることもなく運動会に集まつてまず結成と相成 た次第。

OB会と言つても千差万別。名誉会長様がおいでで会費もパツチリという同窓会のようなのもあれば、意気合つた者同志を縦で結んだクラス会のような気楽なものもあつてよからう。我がOB会は会員の性格上、会長だとか幹事だとかは今のところ定めていないし、規約だとか会費だとかもまだ話し合つていない。いざれ定まるかも知れないし、また永遠に決まらないかも知れない。そこところはまだまだ生まれたてでもあるし、好みもあるの、許していただきたい。六月に例のカトレアで第一回の会合を開いた時も、雑談と今年の夏の集団避暑の打

ち合わせとで終わった。OB会としての体裁も、もし必要ならばそのうち整つて行くことだらう。

ところで、母校の懐かしい写真部室(正しくは美術科からの借り部屋)が、今度の改築工事によつて失なわれてしまつた。暗室は物理室のを借りるそうだがどうにも不便になつたものである。OBとしても憩う場所がなくては、運動会か文化祭にしか出かける気がなくなつてしまつた。写真部に限らずどのクラブにも現役やOBがくつろげる部室が欲しいものだ。OB会はともかく、今のところは現役の写真部の行く末が案じられる。OB会ができて写真部がつぶれたのでは笑い話である。とにかく、この同窓会の大きな輪の中に、今また一つの新しい会が結成した。先輩後輩が一つになつた交流がある限り、このOB会は存続し、OB会が存続する限り、この交流は絶えない。新たに強く結び合つた仲間達なのだ。(高23期 染谷滋)

急報!! 今年度  
総会々場決定

今年度の総会は創立三十周年記念祝賀会と銘打って、来る十月十七日、午後一時から三時まで、豊島園の宴会場において開催されることになりました。

当日は家族連れ：等も大歓迎です。食べ放題、飲み放題(?)の立食形式、福引きその他お土産多数(?)を予定しております。ふるつての参加を幹事一同期待しております。

なお、その他詳しいことは後日、葉書きにて御連絡いたします。

昨年度総会風景

昨年のいずみ会総会は六月二十一日、渋谷の万葉会館に於いて開催された。

参加者は六十数名と前年の半分ほどであったが、これはおりからの豪雨と地理的不便さと七十年安保改正の前々日であったために、多数をいっ

も占めている若い人たちの参加が少なかつたからかもしれない。

しかし、総会そのものは、少人数ではあったが、早稲田大学のバンド演奏でダンスを踊ったり、なかなか、年の差を感じさせず楽しい半日であったもようである。(K・O) 教職員のみ

- △林 泰民先生(国語)
- △新潟県立新津工業高校
- △三上 滋先生(国語)
- △多田保次郎先生(倫社)
- △都立日野高校
- △篠原 昭雄先生(地理)
- △都立日比谷高校
- △小田切理文先生(物理)
- △都立戸山高校
- △松尾 武夫先生(保体)
- △都立国分寺高校
- △市村 緑郎先生(美工)
- △埼玉大学教育学部
- △土屋 尚夫先生(英語)
- △都立北野高校
- △笛吹 幸子さん(司書)
- △都立府中工業高校
- △石川 幸夫さん(事務)
- △千代田区役所

進学状況

国立大学

- △東京大 一二名 △一橋大 三名
- △東大 一〇名 △千葉大 九名
- △学芸大 一二名 △農工大 九名
- △埼玉大 一〇名 △都立大 七名
- △信州大 三名 △電通大 三名
- △東京水産大、北大、名古屋大、東外語大、茨城大、横浜国立大、群馬大、各二名、その他七名。

私立大学

- △早大 六三名 △上智大 一四名
- △慶大 三一名 △青山大 一九名
- △立大 二〇名 △理科大 二五名
- △中大 三七名 △法政大 一四名
- △日大 一六名 △明治大 一八名
- △武蔵一七名 △学習院 一二名
- △成蹊 九名 △明治学院 八名
- △その他 一〇六名

短期大学

- △立川五名 △東女五名 △立教女学院 八名 △共立 八名 △学習院 六名 △青山学院 五名 △実践 四名 △跡見 四名 その他 三一名

各種学校

- △防衛大三名 △竹早教員養成所 二名 △衛生技師学校 三名 △海上保安大、都立高等看護、各一名 △その他 二五名。

就職状況

三菱商事二名、大東京海上火災、安田信託、日本航空、三菱レィオン、住友商事、住友海上、大蔵省等九名

通信欄

来る九月二十三、四日母校で催される文化祭に、いずみ会では同窓会コーナーを設ける予定です。"ひと回りしたあとお茶でも飲んで昔話に花を咲せよう" そんな語らいの場にするつもりです。 二十一期同期会

第二回同期会

去る三月十三日に豊島区民センターで開催。堀江、市村順子、細川、荻野、海老根の諸先生方をはじめ八十四名の結集をもって盛会のうちに終了。その後、二次会、三次会：となり、午前様も続出? 往復はがき回収率五十二% / 次回は来年の予定。

なお、二十一期四百四十二名中、百二十八名に名簿の変更がありました(下宿、進学就職を除く)。二十一期のみの新名簿作成を検討中、詳細は守本純(旧6組)まで。

住所変更について

新名簿作成後、三年が経過しましたが、現在九千人近くの会員のうち、会報等を発送すると千通以上が返送されてくる状態です。住所に変更が生じた場合、必ず同窓会宛に通知下さるようお願いいたします。

表紙は、今年埼玉大学に移られた市村緑郎先生(大泉で美術科)の作品で、今度新築校舎の正面玄関に置かれることになったものです。

編集後記

六月にスタートしたものの新しくページ物にすることで思うように進行がはかどらず二カ月があつたという間に過ぎてしまった。しかし、全員が精一杯働いて、やっと出来たこの会報である。若き日々の思いで是非御一読を!

第十七号  
昭和四十六年九月一日  
発行所 いずみ会  
東京都練馬区東大泉三八〇  
都立大泉高等学校内  
編集 いずみ会々報編集部  
印刷所 (有) 昭映社